



きらめきの地域デザイン

# 碧い風

あおいかぜ

特集 街道を楽しむ

60  
2007 July

# 新交流時代と地域活性化

## はちむら 八村輝夫

(鳥取商工会議所会頭)



鳥取市のある県東部は、JR山陰本線と国道九号で京都と結ばれていることもあり、関西とのつながりが深い地域である。そのつながりをさらに深める中国横断自動車道姫路鳥取線の開通が間近に近づいた。また、一部開通ではあるが、それが鳥取市の経済に与えるインパクトは大きく、

地域活性化に向けた期待も高まっている。鳥取市の経済、とりわけ製造業にとって大きな出来事は鳥取三洋電機の進出である。これを契機に、協力会社が三十数社も地元に着目し、県全体の工業出荷額の半分近くを占めるほどに成長していった。

しかし、その電機業界もグローバルな競争により厳しさを増しており、その状況を打破するには新たな突破口が必要である。姫路鳥取線の開通はその点でも大きな意味を持つている。開通により、関西圏や山陽側によるストローク効果を心配する人もいるが、むしろ関西圏との交流を深めることで新たなビジネスチャンスを創出できると考えている。

鳥取市の製造業は比較的小規模なものが多く、特定分野で強い技術力を持つ。このことから、製造業全体の力を強化するためには共同で業務を受注することが効果的である。そこで、商工会議所でもそうした共同受注のシステム構築に取り組んでいる。また、兵庫県の姫路商工会議所と連携して、商談会の開催もしている。

このような機会を利用して、それぞれの企業が技術力をアップし、新しいビジネスを創出していけば、鳥取市全体の製造業の振興を図っていくことができる。これは観光振興についても同様である。

鳥取県には、日本を代表する砂丘もあるし、温泉も豊富にある。海の幸を中心とした味覚にも恵まれている。しかし、こうした観光資源をフルに生かしているかといえ、残念ながら不十分といわざるを得ない。今回の開通は、これら観光資源を生かす絶好のチャンスである。

鳥取市も、姫路鳥取線の開通に合わせて、「二〇〇九鳥取・因幡の祭典」という通年型のイベントを開催し、観光客の誘致を図る計画である。行政の財源は非常に厳しい状況にあるが、市民の力を結集しながら、地元の特色ある行事などをブラッシュアップし、観光客を引きつけようとしている。これまでのイベントに比べると小規模かもしれない。しかし、観光形態が団体旅行から個人中心に変化し、小さくても魅力的な観光資源が着目されてきている。このイベントを通して、鳥取の新しい観光の魅力に育てたい。

これから地域を売り出していくためには個々の特色あるイベントや行事などを磨き、多くの人たちに発信していくことも必要である。その点で、今年一月に立ち上げた、インターネット上の「ひょうご」は新しい試みとして注目している。

小さくても輝くものをつなげていくというコンセプトは、新しい交流の時代を迎える鳥取市にとって大きな意味を持っている。



# 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちもしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

60  
2007 July



## contents

- 3 「羅針盤」 八村輝夫 鳥取商工会議所会頭
- 特集 街道を楽しむ
- 4 街道がはぐくんだ旅文化 神崎宣武
- 8 司馬遼太郎が街道で見たもの 和田 宏
- 10 地域活性化への思いで結ばれる街道 《ロマンチック街道313》
- 12 新「街道文化」の創出を目指す夢街道ルネサンス
- 14 古道に込められた地元の思い 《三重県・熊野古道伊勢越》
- 15 新しい交流をはぐくむ日本風景街道
- 16 「地域に生きる企業家群像」 株式会社ワープル 社長 十倉純子 《広島市》
- 20 「産学官連携最前線」 水素燃料を使った船舶エンジンを開発 《山口県》
- 22 「キラリ、輝く元気企業」 発泡スチロールの加工技術で新事業を開拓し続けるマリソフロード 《岡山市》
- 24 「シリーズ」21世紀をリードする企業団地 宇部新都市「あすとぴあ」 《山口県宇部市》
- 25 「夢紡人／ゆめつむぎびと」 小田 貢 《鳥取県米子市》
- 28 「CREATOR・中国地域の創造者たち」 錦織良成 《鳥根県出雲市》
- 29 「佳味彩々」 音戸ちりめん 《広島県呉市》
- 30 「庭園道通」 深田氏庭園 《鳥取県米子市》
- 32 「工芸の旅」 つわの和紙人形 《鳥根県津和野町》

# 街道がはぐくんできた旅文化

街道を通して人々は交流を深め、「街道文化」、「旅文化」をはぐくんできた。

それは世界遺産にもなりうるものであり、あらためて見直し、残存する遺跡をたどる意義を再確認したい。

## 神崎宣武

### 街(宿場)と街をつなぐ街道

古代からさまざまな道が通じ、それは世界各地で発達をみている。特に、日本では近世の街道の発達に目をみはるものがあった。

いま現在、一般に「街道」とは、江戸時代に整備されて利用が盛んだった道のことをいふ。「海道」がある。東海道は、鎌倉幕府の成立とともに、京と鎌倉を結んでつくられた。他に西海道が

あり、南海道がある。実際には主に陸路をたどったのであるが、古く道路開作の土木技術が未発達な時代、いちはやく沿海の道が開けたことからその表示が用いられたのだ。

街道とは、内陸にも大規模な道が開けたことを表わしている。そこに、宿場の発達を伴った。語呂合わせをするつもりはないが、街(宿場)と街をつなぐから街道なのである。

### 大名の参勤交代と庶民の旅

いつまでもなく、街道整備と宿場整備は大名の参勤交代のために進められた。「国家的な事業」として優先されたのである。

元和元(一六二五)年、武家諸法度が定められた。この中で、参勤交代の制度も定められている。が、実際にそれが全国大名に及んで実施されるようになったのは、寛永十二(一六三五)年のことであった。

ということは、その間のわずか二十一年間で主要な街道と宿場が建設・整備されたからに相違ない。実は、街道と宿場の建設・整備という緊急を要する公事(公共事業)のために、年貢の徴収も厳しかったし夫役の負担も大きかったのである。したがって、庶民は圧政に虐げられたというのは、たしかにこの時期を指しては妥当である。

しかし、江戸時代二百数十年、二元的にみるわけにはいかない。寛永を過ぎ元禄(一七〇一―一八世紀)になると、年貢や夫役の負担は大幅に軽減された。俗に元禄景気といわれるように、そのころから、社会も安定して庶民の暮らしにも余裕がでてきた。そこで、庶民の旅も発達をみるのである。

大名の参勤交代は、ほぼ春から初夏にかけてである。大多数を占める外様大名のそれは、旧暦四月に定められていた。したがって、大名の道中に出くわさない時期に庶民も街道をつかって旅に出ようとしたのも道理といえるものであった。

### 江戸時代の日本は 世界に冠たる旅行大国

江戸時代の日本は、世界に冠たる旅行大国となった。例えば、長崎のオランダ商館付きの医師であったE・ケンペルが、元禄四(一六九)年とその翌年に、商館長に伴われて江戸参府した際に見聞したことをまとめた『江戸参府旅行日記』には、以下のよう「記されていゝ。

「この国の街道は毎日信じられないほどの人間があり、一、二、三の季節には住民の多いヨーロッパの都市の街路と同じくらいの人々が街道に溢れていゝ。」

「これは、ひとしほの国の人口が多いことと、またひとしほかの諸国民と違つて、彼らが非常によく旅行することが原因である。」

その旅人たちの多くは、寺社詣での善男善女(信心深い人々)であった。右のケンペルの描写は、東海道についてであるが、そこには「伊勢参り」の旅人たちが相当数含まれていたはずである。



歌川広重『東海道五拾三次・日本橋』(保永堂版) 所蔵: 静岡県立美術館

#### profile

#### 神崎宣武 かんざき・のりたけ

1944年岡山県生まれ。民俗学者、旅の文化研究所所長。大学在学中から民俗学者の宮本常一氏(故人)に師事し、以後、国内外の民俗調査・研究に従事している。主な著書に『盛り場のフォークロア』、『ちぢんぷいぷい』、『江戸の旅文化』などがある。



官川を渡った中川原の図（『伊勢参宮名所図会』） 所蔵：大津市歴史博物館

## 二十人に一人が伊勢参り

その伊勢参りの人数は、もちろん確かな数を示すわけにはいかないが、伊勢山田奉行の記録や桑名の渡し改めの記録などからすると、通年では年間数十万から百万人とみるのが妥当であろう。当時の日本の人口比では、およそ二十人に一人が伊勢に歩を進めた、ということになるわけだ。

ちなみに、当時の伊勢へは、江戸から

のである。文化七（一八〇）年に刊行された、当時の大ベストセラーである『旅行用心集』にもこう。

「旅は楽遊山の為にする様に心得居故人情に疎く、人に対して気随多く、陰に人々に笑指せざるべしが多かるべし」  
 そして、人に笑指させないために、「こう提言する。  
 「皆人他国へ出れば、物いひ、風俗いろに替て、己が国言葉に違ふ故に、聞きなれ見なれぬ中はおかしと思ふなれど、又先の人もおかしと思ふ必然なり。しかるを心得ちかひして、他国の風俗、ものいひ等笑なかるべし、誤とるべし」

## 旅人が伝播した文化

「名物を食つが無筆の旅日記」といふが、道中記を書くことも、旅人の教養とくつものであった。『旅行用心集』には、「道中所持すべき品の事」として、最初に、矢立・扇子・糸針・懐中鏡などと並んで、「日記手帳（冊）」とある。そして、「道中にて日記認方之事」という項目を設けて、次のように記している。「道中にて名所、旧跡を尋、風景の能所、又は珍敷物等見聞たるならば、何月何日何所にて何を見ると、有のまくに書付もし、詩哥連俳等の句、心につかミたらば、連続せずとも其趣を日記に記し置入し」  
 そして、詩歌も絵図も、そのときにつ

たと二十日、往復で四十日前後を要した京都・大坂（現在の大阪）まで足を延ばすと、約五十日。すると、年間百万人として延べ五千万人日の行旅となる。

参考までに、現在の海外旅行者（観光旅行者）は約千五百万人で、平均旅行日数が七泊八日（『観光白書』平成十二年度版）。延べ億二千万人日の行旅となる。

ただ、現在の人口は、江戸中期の約六倍であるから、実質的な比較数値はその六分のほど（約二千万人日）とみなくてはなるまい。すると、当時の伊勢参宮は現在の海外旅行ブームに勝るとも劣らない活況であった、といつてよいのである。

## 西国からも大挙して伊勢参り

もちろん、伊勢に参るのは、東海道中に限つたわけではない。西国各地からも、相当数が盛んに伊勢に詣でた。

大坂を基点にいつと、竹内街道を抜けて飛鳥に至り、そこから桜井、橿原、奥津を通り松坂に抜けるルートがある。これが伊勢本街道である。

一方、奈良からは別のルートがあった。ひとつは、都祁山之道を名張に抜け、そこから初瀬街道、北街道に入り青山峠を越えて六軒、松坂へ至る道。もうひとつは、奈良から木津へ出て大和街道を行き上野

まく書（描）こうとすると道中の邪魔になることもあるので、とりあえず見たままを写しおいて国に帰ってから清書するべし、とまでしているのだ。

当時から、日本人の識字率は高かった。それは、ひとつには庶民の旅が発達したから、としてよい。

文人墨客も盛んに旅に出た。各地の篤農家が彼らの旅を助けた。彼らは、そこに逗留して書画を製し、また教えもした。その影響があつて、貧富の差をさぼく問わず、民家の客間には掛け軸や扁額が後々まで伝えられることになったのである。

現在の住宅では和室が少なくなつており、したがつて掛け軸や扁額も後退の傾向にある。しかし、私たちは、旅人を通じてこうした文化が伝播した史実を認めなくてはならないのだ。

## 世界遺産に匹敵する街道文化

他にも、さまざまに「街道文化」あるいは「旅文化」といふものが生まれている。例えば、為替と荷継ぎの制度。例えば、大衆風呂と宴会の習慣。例えば、緑茶と団子・饅頭などの間食。それは現代にも連続と伝わる私たち日本人における文化に相違ない。

しかし、往時の街道風景や宿場情緒はもつたところだが難しきほどの変容をみていることも、方の事実としていふものだ。

へ。さらにそこからは長野峠を越え、伊賀街道・奈良街道を月本へ抜け、松坂へ至る道である。

また、京都からは、東海道を上り鈴鹿峠を越えて関へ。そこから伊勢別街道に入り江戸橋、津、月下を経て松坂へ至るのが一般的な「伊勢道」であった。

これらの街道は、他地方の街道に比べると相当に歴史が古く、古代から近畿と伊勢を結んでそれなりの通行量があったが、それでも江戸時代になって飛躍的にその通行量が増えた。特に、六十年を周期として流行した「おかげ参り」には、四国や近畿の各地からも大挙して参宮客が押し寄せた史実もある。もちろん彼らも、右のいずれかの街道をよつて伊勢に参つたのである。

## 庶民の旅が生んだ文化の交流

ひとり伊勢参宮にかぎらない。人々は、「寺社詣で」という方便をもって旅を楽しんだ。「往きの精進、帰りの観音」という言葉があるように、一般に往路は精進の旅をするが、復路には精進落しと称して宴会や温泉、そして遊里への登楼をもちしんだのである。

そうした庶民の旅は、さまざまな交流を生んでいる。人と人の交流だけでない。文化の交流に注目しなくてはならない。



歌川広重『東海道五拾三次・大津』（保永堂版） 所蔵：静岡県立美術館

たとえば、伊勢参宮に行つた者が遊里に逗留して遊女たちが唄う「伊勢音頭」を習い、それを仲間ですずさみながら帰る。それが、特に西日本各地で、多少の変化は伴いながらも益踊り唄となつていくのである。

そのとき、人々が旅の規範とし共有していたのが、「旅は相みたがい」ということであつた。旅人同士、あるいは旅人と地元の人との旅つきあいを大切にすることによって世間が広がるとするのだ。

つまり、「郷に入つたら郷にしたがえ」。その土地の風物や習俗を偏見をもたず素直に受けとめなくてはならない、とした



中国地域の街道を記した、伊能忠敬『伊能図・西日本』 所蔵：神戸市立博物館

いま、あらためて街道文化（旅文化）を見直し、残存の遺跡をたどることの意義を認め合いたいものである。できるならば、そこで、そうした文化遺産の保存と活用をみんなで考えていくことが大切である。

特に、近世の街道文化は、世界遺産にもなりうるもの、といつても過言ではないだろう。日本人として、その誇りを共有したいものである。

# 司馬遼太郎が 街道で見たもの

司馬遼太郎さんにとって、小説を書くことと街道を歩くことは一体であった。街道を歩きながら、その土地に暮らす人々への関心を深め、風土ぐるみで人間を書いていた。

## 和田 宏

### 小説を書くことは 街道を歩くこと

太古からの人の営みが街道をつくり出し、幾層にも歴史が踏み固められてきた。街道をたどるといことは、司馬さんにとって空間だけでなく時間を移動することであった。

歴史的な出来事について、書齋であらゆる史料を調べたつもりでも、その地に立つと思ってもかけない「土」に気づく。だから小説の舞台には何度も足を運ぶ。そこで舞台そのものに興味が移って、「紀行文」を書くようになった。いつと、いつ分わかりやすいがそうではない。司馬さん

んとして小説を書くことと街道を歩くことは一体であった。「小説を書くとき、私はなるべくその舞台となる風土ぐるみで人間を書いていきたい」と、司馬さんはあるとき述べている。風土を知るにはそのエリアを丹念に歩かねばなるまい。つまり「街道をゆく」のである。  
直木賞を受賞して世に出たばかりの司馬さんが、関ヶ原で若い作家仲間を前に合戦を「実況放送」して舌を巻かせたという逸話がある。  
寒い日で風邪恐怖症の司馬さんは首になにやら巻きつけた上に頬被りして現われ、みんなを驚かせたらしい。歴史的事件はいつも街道上で起きる。ちなみに関ヶ

原は諸街道の結び目と書いていい地点である。

### 土地の人からじかに聞きたい

『街道をゆく』という作品は、一九七二（昭和四十六）年から亡くなるまで、「週刊朝日」に四半世紀にわたって連載された。先に「紀行文」と書いたが、その枠を越えて、時間と空間の中に自在に遊ぶという、司馬さんにはできない新しいジャンルを切り拓いた。しかし、関ヶ原の話が示すように、この試みは思いつきで始めたのではなく、そもそも最初から小説と不離のものであったことがわかる。

『街道をゆく』は私の編集者としての仕事とは関係なかったが、その姿勢は小説の取材の場合と同じであったろう。目的地に着いてタクシーに乗れば、すぐ運転手さんに話しかける。宿に着くと仲居さん



歴史の重みを感じながら奈良・二月堂前を歩く。



防府市三田尻港での取材光景

#### profile

#### 和田 宏 わだ・ひろし

1940年福井県生まれ。編集者。大学を卒業後、文藝春秋に勤務。出版部で長く司馬遼太郎氏の担当編集者を務め、「司馬遼太郎全集」などを編集。2001年に退社し、02年に日本海文学大賞を受賞。著書に『司馬遼太郎という人』（文春新書）がある。

んをつかまえる。その地に昔から住んでいる人の話が聞きたいのである。

鹿児島では建物の中にしばらくいて外に出たら、桜島の灰がうすうすと積もっている。すると、すぐそこで筆を使っている人に、今日の灰はいつもと比べてどうなのかを聞く。弘前ではお城までの雪道をホテルで借りたコム長で歩いてみて感触を確かめた上で、土地の人に今日の雪の「シバシバ具合」を聞く。

何度も行っているから、灰の降り方も雪の固まり具合も知っている。それなのに聞くのは、土地の人からじかに聞きたいからである。いつでも自然のことより、そのなかで暮らす人々のほかに重点がある。

### 人間の営みに対する興味と旅

司馬さんの『街道をゆく』はあくまで人間の営みに対する興味で書かれたもの

なのである。可憐で健気でもあり、ふてぶてしくて始末に負えないものでもある。人間という生き物への深い関心がこれを書かせた。

「司馬さんは満開の桜も、全山の紅葉も興味がないんだよなあ」とは、取材同行者の共通の感想である。自然そのものより人の手になるもの、例えば山肌に営々として築かれた柵田の光景などに、激しく感動を発する人なのである。

司馬さんという人は作家に多い奇抜さがまったくない人であったが、妙なところがないわけではない。

その土地の食べ物や酒ほど風土に結びついたものはないが、それにはほとんど筆を費やさないことだ。この人の極端な偏食のせいである。子どものときから外に食べに連れて行かれても、食べるものを決めるのに苦労したという人なのである。

『街道をゆく』の挿絵を長い間担当し、一緒に旅した須田剋太画伯も「天才はあまり食へないんですね。普通の人だったら腹が減ってしまうと思うんだけど」とあきれている。

### 電池が切れかけたときも

『街道をゆく』を長く続ける間に、もう止めたいという言葉が司馬さんから何度か聞いた。「懐中電灯の電池が切れ、何かを見ようとしても照らせないんだ」とまで言った。それは小説を書けなくなるといつことにもなるではないか。しかし、そのつど危機を乗り越えて、亡くなるまで書き続けた。

司馬さん夫妻は、正月は旅先で過ごす。一九九六（平成八）年の正月は取材の都合をかねて名古屋のホテルで過ごした。

二が日は司馬さんの話で大いに盛り上がり、楽しい夜になった。翌日の四日から名古屋近辺の取材が始まる予定だったが、私はこの朝東京に戻った。それが私にとって司馬さんとの別れになった。

司馬さんは「この日からたまた四日後に、『街道をゆく』の「濃尾参州記」篇を未完のまま、見知らぬ街道に旅立っていた。



取材メモをとる司馬氏。人間への深い関心が『街道をゆく』を書かせた。

# 地域活性化への思いで 結ばれる街道

《ロマンチック街道313》

広島・岡山・鳥取の県境を越える「ロマンチック街道313」。

そこで、地域の魅力を楽しみ世界に発信するべく、

地域を活性化しようという人たちの思いが、多様な交流を生み出している。



街道の魅力を満載したマップを手にする高橋社長

## 故郷の活性化と ロマンチック街道

「このままでは若者たちは流出し続け、生まれ故郷は寂れるままだ。自分に何ができるだろうか。広島県福山市に本社があるキングパーツ株式会社の高橋孝二社長が自分自身に「どう問いかけたのは、今から約三十五年前のことだ。」

高橋社長は、若いときに故郷を離れ、大阪でがむしゃらに働き続けてきた。その結果、精密鑄造品メーカーとして独立できるまでになってきた。これから自分に求められるのは地域に奉仕することだ。そう決意した高橋社長はキングパーツを設立し、あえて福山市に本社を置いた。

少しでも故郷に雇用の場を創出しようと考えたのだ。

福山市で事業活動を展開しながら、地域活性化にも思いをめぐらせていた高橋社長が着目したのは、福山市と鳥取県倉吉市を結ぶ国道313号だ。この沿線には、中世の港町・市場遺跡の「草戸千軒町遺跡」をはじめ、江戸時代のたすまいを残す「神辺本陣」(福山市)、銅とベンガラで栄えた吹屋の町並み(高梁市)、江戸初期の代表的な庭園で知られる頼久寺庭園(高梁市)などがあり、倉吉市には白壁土蔵の町並みが残っている。さらに、深谷や高原、温泉にも恵まれている。

## 県境を越えた まちづくりのスタート

国道313号がいくら観光資源に恵まれているとしても、単独では強い力にはならない。拠点ごとにある地域資源を結びつけてこそ、強い魅力となり、日本だけでなく世界にもアピールできる。

そう考えた高橋社長はまず、沿線の福山・井原・高梁・真庭・倉吉の青年会

議所に呼びかけて、「ロマンチック街道313連絡協議会」を立ち上げた。広島・岡山・鳥取にまたがる、県境を越えたまちづくりのスタートだった。

沿線の町はかつて鉄で栄えた町であり、国道313号はある意味では「鉄の道」であった。しかし、より多くの人たちに沿線の歴史に関心を持ってもらい、多様な魅力を楽しんでもらうためには、幅広い人たちが参加できる必要がある。そこで、青年会議所の若い人たちと一緒に活動することにしたのだ。

また、大きな力となったのは、沿線の行政機関などで構成される「国道313号整備促進期成会」だ。期成会は国に道路整備などを訴え、連絡協議会は温泉や食べ物、名所旧跡などをPRする。連絡協議会が国に訴えてもなかなか効果は上がらないし、また一方、行政は個別の温泉地や土産品などをPRすることは難しい。そこで、両者が連携して活動することにしよう。お互いができないことを実現しているのだ。まさに、車の両輪の関係である。

## 時間を掛けて 街道をついていく

高橋社長がロマンチック街道の設立を唱じてから、すでに二十年の歳月が過ぎた。この間、連絡協議会は約二百キロメ

ートルのロマンチック街道を七泊八日で歩き通す「ロマンチック街道313ウォーク」や、自慢の車やバイクで縦列走行する「ロマンチック・ツーリング」などのイベントを開催し、多くの人たちが参加した。また、ホームページでは沿線の名所や美味しい食べ物などの情報を映像で提供するだけでなく、より多くの人たちに楽しんでもらえるように、独自にマップを作成している。

こうした連絡協議会の活動を高く評価して、国土交通省も国道313号の標識に「ロマンチック街道」の文字を入れるようになった。

「この二十年の間に、沿線の人たちの意識は大きく変わってきたと思いますが、本

当の意識変革には五十年くらいの歳月が必要ではないでしょうか。そのためには、できるだけ多くの人に『ロマンチック街道313』を知ってもらうことが重要だと思っています」と、高橋社長。

そのために、二〇〇三(平成十五)年には「ロマンチック街道313」を商標登録するとともに、関係者が自由に使えるようにした。それによって、連絡協議会以外の独自の取り組みにも名称を使えるようにしたのだ。

故郷の地域活性化を願う人たちの思いが込められた国道313号では、今日も多くの車や人が行き交い、多様な交流を生み出している。



自慢の車で街道を走る「ロマンチック・ツーリング」



街道周辺は名水百選をはじめ多くの観光スポットに恵まれている。

# 新「街道文化」の創出を目指す 夢街道ルネサンス

新しい「街道文化」を創出しようとする、中国地域で展開されている夢街道ルネサンス。それは、地元の人たちの熱意と行動力に支えられながら、点から線へ、さらには面へと広がりを見せている。

## 街道を見直して 豊かで个性的な地域を

日本海と瀬戸内海、そして中国山地という変化に富んだ中国地域には由緒ある街道が数多く存在していた。街道ではヒトとモノ、そして情報が行き来し、街道沿いでは豊かな地域文化と自然がはぐくまれてきた。

少子高齢化や過疎化などが日本の大きな地域問題となっているなかで、もう一度こうした「財産」を再発見し街道を見直していくことで、豊かで个性的な地域に再生していくことが求められている。その取り組みのひとつとして注目されているのが、中国地域で展開されている「夢街道ルネサンス」である。

夢街道ルネサンスが始まったのは二〇〇一（平成十三）年度で、それ以降、毎年三地区から四地区を認定しており、現在では二十一地区が認定されている。

「認定数を増やすことが目的ではなく、それぞれの地区が个性的な活動を展開しながら、他の認定地区とつながっていく、それが新しい街道になっていくことを目指したいと思っています。」

こう語るのは、夢街道ルネサンスプロジェクトチームの事務局を務めている国土交通省中国幹線道路調査事務所（村尾好昭所長）である。点から線へ、さらには面へと展開することによって、より多様で充実した「街道文化」を形成しようとしているのだ。

認定地区では、地元住民たちによってもさまざまな活動が展開されている。山口県の城下町・萩と瀬戸内海の三田尻港（防府市）を結ぶ萩往還では、地元の小学校と公民館が共同で萩往還の歴史などを学び、「萩往還体験学習」を開催した。そして、「学習の環として」「ミ」を拾いながら萩往還の一部約十キロメートルを歩き、萩往還の大切さを再認識した。

また、岡山県津山市の出雲街道津山城東むかし町は九八九（平成元）年か



城下町の地割りが残るますだ歴史浪漫街道

## 夢街道ルネサンス認定地区(認定順)

- 萩往環 ————— 山口県萩市・山口市・防府市
- 西国街道 ————— 広島県東広島市
- やばせ八橋往来 ————— 鳥取県倉吉市
- ちづ智頭往来 ————— 鳥取県智頭町
- 風待ち海道 ————— 島根県隠岐の島町
- 出雲街道勝山 ————— 岡山県真庭市勝山
- 二葉の里歴史の散歩道 ————— 広島市東区
- 天領江津本町霽街道 ————— 島根県江津市
- 境往来 ————— 鳥取県米子市
- 出雲街道新庄宿 ————— 岡山県新庄村
- 出雲街道津山城東むかし町 — 岡山県津山市
- 鹿野往来 ————— 鳥取県鳥取市鹿野町
- ちめん木綿街道 ————— 島根県出雲市平田町
- ますだ歴史浪漫街道 ————— 島根県益田市
- 銀山街道上下宿 ————— 広島県府中市上下町
- いにしへの里三次物怪・でこ街道 — 広島県三次市
- 石州街道出口通り ————— 広島県府中市出口町
- 毛利侯御殿湯街道 ————— 山口県下関市豊浦町
- 青石畳通り ————— 島根県松江市美保関町
- 吹屋往来とと道 ————— 岡山県高梁市成羽町
- 草津まち歴史の散歩道 ————— 広島市西区



高瀬舟発着場跡が残る出雲街道勝山 智頭往来の重厚な建物

〇（平成十二）年度、活動を展開しているのは、中国経済連合会に事務局をおく夢街道ルネサンス推進会議である。

夢街道ルネサンスのコンセプトは、速く移動することを競う「通過型文化」から「楽しみながら巡る文化」、地域主体の活力ある地域づくりを目指して、新「街道文化」を創出しようというものだ。そのキーワードは、歴史・文化・自然の活用、地域主体の個性ある地域づくり、連携と交流、街道機能の継承と交流圏の拡大、地域情報の共有化と発信である。

そうした地域での取り組みを支援するために、夢街道ルネサンス推進会議では、交流や勉強の場づくりによる地域づくりの支援、夢街道ルネサンス認定地区の拡大による夢街道形成支援、そして新聞などを活用した広報支援を行っている。

ら続いている地元住民主体のイベントで、時代行列や美男子コンテストなどが行われている。このイベントを継続するなかで、城東大鼓チームが結成されたり、独居老人の安全確保のための連絡網も構築された。一過型ではなく、イベントを通じて地域づくりが生まれきたのだ。

夢街道ルネサンス推進会議は、こうした地域での活動体験を共有するために、フォーラムの開催やメディアでの情報発信などを行っている。そうすることによって、それぞれの地域が連携し合い、新しい街道、新しい街道文化を形成し、地域の活性化に結びつけようとしているのだ。

地域の人たちがはぐくむ街道を楽しむながら巡る。そんな街道文化の創出を目指した夢街道ルネサンスは、地元の熱意と行動力に支えられながら、着実に実を結びつつある。



白壁となまこ壁の銀山街道上下宿

# 古道に込められた地元の思い

## 伊勢から熊野三山への古道

三重・和歌山・奈良の三県にまたがる「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたのは〇〇四(平成十六)年。日本で十一番目の登録である。

紀伊半島には「熊野三山」、「吉野・大峯」、「高野山」という三つの霊場があり、それらは「熊野参詣道」、「大峯奥参詣道」、「高野山町石道」と呼ばれる参

詣道によって結ばれている。そのうち三重県の伊勢から海沿いに熊野三山を目指すのが「熊野古道伊勢路」である。江戸時代にはお伊勢参りを終えた巡礼姿の人々が列をなして歩いてきたことから「蟻の熊野詣」とも例えられていた。

この道は生活道として長く利用されていたが、鉄道や道路の開通などによって使われなくなり、やがて人々の記憶からも消えようとしていた。



まごせ 石畳が美しい馬越峠

## 古道を愛し 守り続ける住民たち

熊野古道伊勢路が一躍注目されるようになったのは、一九九九(平成十一)年に開催された「東紀州体験フェスタ」だった。このフェスタは、東紀州地域の活性化を指したもので、そこで地元の人たちによる熊野古道伊勢路の保存活動が紹介され、多くの人たちの共感を得た。地元の人たちは、古道を保存するために草刈りをしたり、古道にまつわる歴史や文化などを学んでいたのである。

フェスタの成功をきっかけに、県や市町村などで構成する東紀州地域活性化事業協議会(現在は東紀州観光まちづくり公社)は古道を生かした地域活性化に本格的に取り組むようになった。観光客が気軽に熊野古道を歩けるように十七のコースに分け、地図やポイントなどを掲載したガイドブックを作成するとともに、熊野に縁のある講師による「みえ熊野学巡回講座」なども開催していた。

一方、自分たちで古道の歴史などを学んでいた地元の人たちは、「熊野古道語り部友の会」を結成し、観光客たちに古

道の魅力を伝えている。また、古道の峠ごとには「峠を守る会」といった保存会が生まれ、ボランティアで古道の清掃や草刈りなどを行っている。熊野古道伊勢路にはほとんど「ミミ」が落ちていないと言われるが、それは古道を歩く人たちのマナーが良いただけでなく、こうした人たちの活動に支えられているのである。

## 古道の素晴らしさを伝えたい

「世界遺産の登録で観光客は増えていますが、とりわけ家族連れや少人数のグループが古道をよく歩かれています。歴史と文化が刻まれた古道を歩くことに楽しさを感じてもらっているのではないのでしょうか」。こう語るのは、東紀州観光まちづくり公社の福田由佳さん。

こうした住民と行政の活動と協働するかのようになり、地元民間企業も積極的に活動を展開している。銀行は預金残高に応じて古道保全活動への寄付を行う「熊野古道定期」を発行し、バス会社は古道の清掃ウォークを定期的に行っている。

長い歴史と文化をもつ熊野古道伊勢路と、その道を保存し多くの人たちに素晴らしさを伝えようとしている地元住民や企業など。そこからは、多くの人たちに道の素晴らしさを知ってもらいたいという思いが伝わってくる。

# 新しい交流をはぐくむ日本風景街道

## 「景観のよい寄り道」へつくり

日本列島で拡大し続ける道路ネットワークは、「シーニックバイウェイ(Scenic byway)」という新しい「街道」を生み出そうとしている。シーニックバイウェイとは、景観のよい(シーニック)わき道・寄り道(バイウェイ)といった意味の造語で、行政や住民、利用者などが一体となって

地域の沿道景観や自然環境の保全・整備、地域文化の発信などに取り組むものだ。

マイカーで道路を移動しながら、美しい景観や地域ならではの伝統文化などに立ち寄り、気軽に立ち寄りて風景などを楽しめるようにしようというもので、いわば新しい街道づくりともいえる。

シーニックバイウェイの発祥は米国である。米国では一九八九年に「シーニックバイウェイ法」が成立し、景観性・歴史性・自然性・文化性・レクリエーション性・考古学的性の六項目のいずれに該当するかで評価し、一項目以上をナショナル・シーニックバイウェイ、二項目以上をオールアメリカンロードとして指定している。これにより、観光面などでの経済効果に加え、地域の人々が自らの地域や道路などの整備に愛着や誇りをもって取り組むといった成果が挙げられている。

## 先行的に取り組むが スタートした北海道

日本では、観光振興などを目的に国土交通省が施策として取り組み始め、二〇〇三(平成十五)年にはレンタカーを利

用した観光形態が増加している北海道で先行的に二つのモデルロードを指定した。その一つが支笏洞爺「セ」ロードと大雪・富良野「ド」ロードで、二年間の試行後、正式にロードとして指定された。その後もモデルロードの追加指定などが行われ、現在では六ロードが指定されている。

そのうち、二つの国立・国定公園を走る支笏洞爺「セ」ロードでは、距離が長くエリアが広いために二つのエリアに分け、それぞれの地域資源を生かした活動を展開している。

例えば、多くの観光客が訪れる「セ」羊蹄エリアでは、地元の活動団体が「セ」バスで五町村の国道・道道・町村道を経由し、お薦めポイントを巡るツアーを実施している。このツアーは、予約開始とともに満席になるほどの人気で、広域的なビジネスとしても注目されている。

## 民間の戦略会議も 七十二のモデルロードを指定

国の取り組みとともに、民間での動きも活発化している。二〇〇五(平成十七)年には、日本経団連会長を委員長とする

シーニックバイウェイ戦略会議が設立された。戦略会議は翌年には「日本風景街道戦略会議」と改称し、訪れる人と迎える地域との交流による美しい街道づくりを支援する仕組みや体制の確立に取り組んでいる。

その一環として、二十程度のモデルロードを選定するために全国から募集したところ、当初の予想をはるかに上回る七十二ロードの応募があった。その結果、いずれも大きな特色があるため、方針を変更してすべてをモデルロードとして支援することとなった。

中国地域では、「縁をつなぐ神仏の通ひ路(鳥根県・鳥取県)」、「よつて隠岐の寄り道(鳥根県)」、「大山遠望歴史の道(鳥取県)」、「R185みちはた会議(広島県)」、「下関フルライン(仮称)山口県」、「あおぞら美術館通り(山口県)」、「の六ロードがモデルロードとなっている。

地域を主体とした新しい街道づくり。その試みは、地域密着型の観光が主流となっている中で、地域の新しい可能性を示しているといえる。



ニセコ羊蹄エリアで運行されているレトロバス



株式会社ウーブル 社長 十倉純子 《広島市》

# 自分に授かったものを使い切って恩返しする

## 自分の理想を追い求めて 合意書に押印

デスクの上の合意書。そこに刻まれた文字二文字を確認していた。すでに何度も同じことを繰り返してきた。しかし、それでももう一度、自分で確認したかった。それは、合意を決意した自分の考えをこれからしっかりと堅持していきたいという、強い意思からだ。

ふとオフィスを見渡した。数時間前には、元気な声で電話の応対をし、書類を抱えて足早に外出する社員の姿があった。しかし今は、昼間の時間が嘘のように静まりかえっていた。

「合意書の重大さは経営者である自分が一番理解していましたし、これまで一緒に頑張ってきた社員のこともしっかり考えました。会社の業績も順調に伸びてきました。しかし、自分が本当にやっていきたいことと会社の経営を両立できないと判断した時、私は自分の理想を選択したのです。これでいい。そのことを自己確認した私は机の上の合意書に判を押しました」

それは、クリスマスイブを数日後に控えた昨年末のことだった。窓の外では、クリスマスイブを待ちきれないかのよう、シングルベルのメロディーが流れていた。経営者が語る合意書とは、自分が創業した会

社の株式をすべて譲渡することにも、教育事業の営業権を譲り受けるものだ。

ほぼ半年前のことを思い浮かべながら、経営者はほきりとした口調で語った。株式会社ウーブルの十倉純子社長である。ウーブルとは、フランス語で仕事や作品という意味である。

## 三歳からクラシックバレエ 漬けの日々

十倉社長は、儒学者・頼山陽を輩出した広島県竹原市で生まれた。父親の仕事の関係で住居を転々としたが、中学生の頃から広島県呉市に生活の拠点を構えた。

三歳の時、十倉社長は公民館でクラシックバレエを初めて目にした。病気を患っていたためにひどくやせていたのだが、クラシックバレエの演技がとても魅力的だったのだらう。思わず演技に合わせて「ジャン」と跳ね回った。

それから三日間、十倉社長は母親にクラシックバレエをやりたいとせがみ続けた。その結果、<sup>すわ</sup>洲和みち子先生のバレエ教室に通うようになった。洲和先生は、世界的なバレリーナである森下洋子さんをはじめ多くのバレリーナを育てた、日本を代表する指導者だった。

洲和先生の指導は厳しかった。益も正

月もなく毎日レッスンで、「勉強する時間があったら練習しなさい」といっのが口癖だった。試験が近くなつたために、百人一首を暗記しながら踊ることもあったし、修学旅行の時も、同級生が寝静まつてからひとり一人で踊っていた。

「つとしたレッスン漬けの日々を続けた十倉社長であるが、バレリーナとして大きな問題が生じてきた。技術が向上すると入アを組むようになるのだが、そのためにはやせることが必須であった。

ところが、多くの女性がそうであるように、十倉社長も体重が増加してきたため、バレリーナとしては食事制限をすることが必要になった。しかし、無理な食事制限は、子どもを生めない体になる恐れもある。

十倉社長は悩み続けた。そんな時、友人の紹介で知り合った男性からアドバイスを受けた。それは、バレリーナも素晴らしい生き方であるが、結婚して子どもを出産し、幸せな家庭生活を守っていくのも大切な生き方のひとつだということだった。「そのアドバイスを聞いて、クラシックバレエ以外の世界でやってみてもいいかと思つたのです」

大学を卒業すると、十倉社長はその男性と結婚し、二十三歳の時には最初の子どもを授かった。

profile

十倉純子 とくら・じゅんこ

広島県竹原市生まれ。大学を卒業後、すぐに結婚。2人の子どもを出産後、旅行会社向け人材派遣会社を経て、1993年に株式会社フュージョンを設立。その後、2006年に人材と教育のコンサルタント会社である株式会社ウーブルを設立し、社長に就任。ウーブルの資本金は800万円である。

文：城市 創（島根県益田市出身） 写真：藤原隆雄（広島市在住）



スタッフとの気軽な会話がオフィスを明るくしている。

## 正社員にひけをとらない 人材を派遣

一人目の子どもを出産した十倉社長は、二十六歳になると、母親に子育てを手伝ってもらい、ツアーコンダクターの派遣会社に勤めるようになった。非常勤とはいえ、生まれて初めての会社勤めだった。ツアーコンダクターとは、団体旅行で観光客の世話などをする人だ。

英語が得意である上に、てきぱきと人の世話ができる十倉社長の仕事ぶりは、社内外から高く評価されるようになり、二十九歳の時には初代広島営業所長に就任した。その時に十倉社長が重視したのは派遣する人たちの教育だった。

「その会社は旅行会社のツアーコンダクターだけでなく、空港のカウンターにも人を派遣していました。いい人材を育て、正社員に引けを取らない能力を養って派遣するというのが、私たちのコンセプトです。」



研修会で講義する十倉社長

それまで対象から外されていた製造業務への人材派遣が可能になってきたのだ。

これまでは、人材派遣会社できちんと教育した人を派遣人材として登録し、依頼があれば派遣していた。しかし、製造業務への派遣が許可されると、とにかく依頼された人数を確保して派遣する傾向が強まってきたのだ。派遣会社の中には、現住所すら確認できない人を派遣するところもあった。

「フュージョンが考えていたのは、研修を受けた人しか派遣しないということですが、しかし、それは必ずしもマーケットが望んでいるものとは合致しなくなってきたのです。その時から、私は自分の胸に手を当てて、本当にこれで良いのかを問い続けました。自分で始めた事業ですから、本当に悩みました。」

その時、十倉社長の胸の中にあつたのは社員とクライアントには迷惑を掛けないということだった。自社の業務を、教育した人材の派遣と単なる人材の派遣に分割することも考えた。しかし、それでは同じ会社として矛盾がある。

悩み続けた十倉社長が決断したのは、会社の株式を譲渡し、その代わり教育事業の営業権を譲り受けることだった。自分が所有しているフュージョンの株式をすべて別会社に譲渡し、経営にも関わらない。その代わり、フュージョンが行ってきた教育

だから、教育には力を入れました。」

その教育は業界で高く評価され、仕事も着実に増えていった。それとともに、十倉社長の仕事も多忙を極めるようになった。家事をこなしながら、約二百人のスタッフを動かさねばならなかったのだ。

働きすぎて体調を崩したり、家族に迷惑をかけたこともあった。このままではいけない。これから何をやるにしても、一度ゆっくり考えることが重要だ。そう感じた十倉社長は、後任者が育つていることもあり、人材派遣会社を退職した。派遣会社からは強く引き留められたが、三十五歳の決断が揺らぐことはなかった。

## スタジオの一角から始まった 人材教育会社

退職後、専門学校などの講師を務めながら、十倉社長は何をすべきかを模索し続けた。そこで考えたのが、自分が持っているものを生かして起業することだった。では、自分が持っているものとは何だろうか。それは、人材派遣会社時代に培ってきた人材教育だった。新入社員の研修や社会人向けのビジネスマナー、ホスピタリティなどを教える事業である。

十倉社長はさくく夫に相談した。返ってきた言葉は、「借入金なしでやること。三年間は保証人にはならない」というものだった。商売をやっていた両親の苦労を事業を、十倉社長が新しく設立する会社が引き継ぐというものだ。その合意書に押印したのが昨年の十二月中旬で、正式に発表したのはクリスマスの翌日だった。

## 自分を集大成する ロールモデル

十倉社長は、フュージョンの教育事業を譲り受けるためにワールを設立するとともに、これまでお世話になったクライアントへのあいさつ回りをしていた。クライアントから返ってくる言葉の中には、「経営者が逃げてどうする」といった厳しいものもあった。

「そうではない、自分が目指していることを実践したいんです。そのことを説明して回りました。確かに厳しい言葉もありましたが、それは逆にうれしい言葉でした。実際、すべてのクライアントがワールを応援してくださっていますから。」

十倉社長が新会社で取り組んでいるのは「ロールモデル」という教育だ。これは、お手本を示すことにより人材を育てようというものである。

十倉社長がこの教育方法に取り組んでみたいと強く感じるようになったのは、フュージョン時代に広島県東広島市のJICA（独立行政法人国際協力機構）で起業家の育成をテーマとした研修を行ったときからだ。その研修会にはフィリピン

知っていたからその言葉だった。

退職後の三年間で貯めたお金を資本金にし、事務所は妹の原のり子さんが提供してくれた。原さんは、十倉社長とともに洲和先生に師事し、その後はハレリーナとしてニューヨークでも活躍した人だった。帰国後は広島市でクラシックバレエの教室を開いており、そのスタジオの一角、約三坪が新しく設立した株式会社フュージョンの本社となった。

## マーケットと 理想の隔たりに悩む

一九九三（平成五）年に創業したフュージョンは、教育だけに事業領域を絞り、着実に業績を上げていった。しかし、その一方で、人材派遣の依頼も後を切らなかつた。かつての人材派遣会社での仕事ぶりがクライアントの脳裏に焼きついていたのだ。

「派遣はしていませんといくら言っても、受話器からはお世話になつたクライアントの困った声が聞こえてきます。また、社員もやってみたいと言つようになりましてそこで、人材派遣業を始めることにしたので。」

創業から三年後にスタートした人材派遣業は好調に業績を伸ばしていたが、二〇〇四（平成十六）年になると大きな変化が訪れた。労働者派遣法が改正され、その人と意見を交わすうちに、ロールモデルが有効ではないかという議論になつた。十倉社長はそれまでも言葉として耳にしていたが、振り返ってみると、自分がこれまでやってきたことがロールモデルだと気づいたのだ。ツアーコンダクターの派遣会社以来、常に自分であるべき姿を示し、それにより各人が持っている能力を発揮させてきたのだ。

「その意味では、これから実践しようとしているロールモデルは私自身の集大成であると思っています。」  
「こう語る十倉社長の表情は、これまでと同じように笑顔に満ちていたが、その視線は挑戦者の視線そのものだった。その視線を受け止めていると、十倉社長がインタビューの途中で語った言葉が脳裏に浮かんできた。

「私の能力や運は、先祖がつくったもの。その授かったものをすべて使い切つてこそ恩返しだと思っています。」  
使い切ることとは、同時に燃え尽きることもである。そのことを確信して、新しいビジネスの世界を開拓する。その意気込みを微塵も感じさせることなく、女性

企業家は満面の笑みを絶やさなかつた。

# 水素燃料を使った船舶エンジンを開発

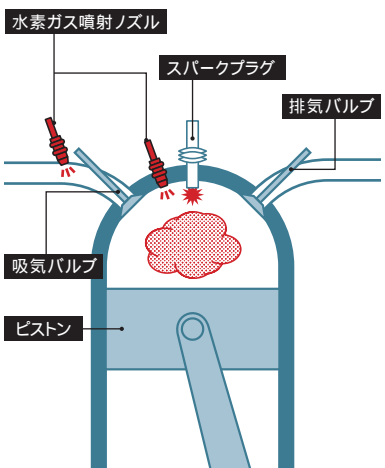
《山口県》

クリーンエネルギーを使った漁船。そんな発想からスタートした産学共同の研究開発は、初めて海上で試運転に成功しただけでなく、世界の海に貢献しようとしている。クリーンエネルギーの漁船を造ろう

環境保護が地球規模の課題となつている中で、とりわけ二酸化炭素の排出量抑制は喫緊のテーマとなっている。二〇〇五（平成十七）年に発効した京都議定書では、二〇〇八（平成二〇）年か二〇一三（平成二四）年の間に、例えば日本では二酸化炭素の排出量を九九〇（平成二）年基準比で六%削減する必要があるとしている。こうした中で、二酸化炭素の出ないクリーンエネルギーとして注目されているのが水素燃料だ。その水素燃料を使った水素エンジン船舶が山口県下関市で開発され、水産関係業界を中心に注目を集めている。下関市は、日本を代表する水産都市であり、市内のあちこちで大きな造船ドックを目撃することができる。



水素エンジンを前にした江副教授



水素エンジンの模式図



水素エンジン船の海上試運転

水素エンジン船舶を開発したのは水素エンジン船舶研究会で、発足したのは二〇〇四（平成十六）年である。きっかけは、市内に本社を置く日本海洋産業株式会社（松浦福太社長）の研究会の代表も兼任）が下関商工会議所でクリーンエネルギーの漁船の造船を提案したことだ。その提案に賛同した企業が中心となり、市内にある独立行政法人水産大学校と相談し、産学連携で研究を進めることになった。

## 普及を優先して既存エンジンを改良

クリーンエネルギーといっても多様である。研究会が当初考えていたのは燃料電池だった。しかし、漁船に使用するには燃料電池のコストや性能の面から現実的でないと判断した。そこで、すでに漁船に使われているディーゼルエンジンやガソリンエンジンを改良して、水素燃料で動か

そうと考えたのだ。

また、山口県の周南地区には多くの化学工場が立地しており、その副産物として全国最大規模の量の水素が生産されている。そのため、山口県でも水素フロンティア構想を掲げて、水素を家庭用燃料電池に使用することを研究していた。このように、恵まれた水素の入手環境も水素に着目する大きな要因となった。

しかし、学内に水素エンジンの研究者がいるわけでもなく、ある意味では暗中模索のスタートでした。こつ語るのは、水産大学の江副覚教授。江副教授は水産大学の窓口として、水素エンジンの技術開発を担当している。

水素エンジンは、燃料を入れる吸入口から水素ガスを噴射し、スパークプラグで点火してピストンを動かすものだ。構造はほとんど既存のエンジンそのものであるが、大きな課題となったのは水素の量と点火のタイミングだった。水素の発火温

度は高いが、エンジンの高熱によって発火するケースもある。そこで何度も実証実験を行い、発火のタイミングを調整できるようにした。

こうして開発された水素エンジンには、ディーゼルエンジンなどと比べて、さまざまなメリットがある。排水するのはほとんどが水だけで海洋環境保全に貢献するし、軽い気体であるために万が一二次被害も少なくなる。また、石油系燃料のように遠隔地から輸送する必要も少ない。

## アイスランドへの連携にも進展

こうして二〇〇六（平成十八）年には第一号の実験船が水産大学校前の湾で海上試運転を行った。「実験船は湾内を走行することはできましたが、まだまだ改良すべきことは数多くあり、実験を重ねて安全性や効率性などを高めていきたい」と、江副教授は語っている。

その一方で、外国や他の地域と連携して水素エンジンを普及しようという構想も動き出している。そのひとつが、水産会社の構築に取り組んでいるアイスランドとの連携だ。

海に囲まれたアイスランドは水産業が盛んである。そこで、共同して水素エンジン船舶の開発を行い、将来的には水素エンジン船舶の建造や運航を行おうという構想が、二〇〇六（平成十八）年に独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）の事業として採択された。

また、島根県では、宍道湖がラムサール条約に登録されたことを契機に、風物詩ともなっているしじみ漁の船舶に水素エンジンを搭載し、水辺環境を守っていくという計画が、民間を中心に進んでいる。水産都市・下関で産声を上げた産学連携の取り組みは、海を越えて広がり、まさに地球規模での環境保全活動につながるとしている。

# 発泡スチロールの加工技術で 新事業を開拓し続ける

## マリノフROOT 《岡山市》

先端技術の融合で開発した発泡スチロール製の建築用装飾や造形品、それを生み出した豊かな発想と行動力は、さらさら新たな事業を創出しよつとしていく。

### 発泡スチロール製の 建築用装飾

欧風のしゃれた窓枠や、大理石のような重厚感あふれる柱など、最近のホテルやオフィスビルは豊かな空間の創造に工夫をこらしている。実は、「この窓枠や柱などはコンクリート製ではない。必要な強度を保ちながら、独自の空間を演出するために製作された、発泡スチロール製の建築用装飾品である。この分野でデベロッパや建設業者などから注目されているのが、岡山市の株式会社マリノフROOTである。

マリノフROOTの設立は一九八九（平成元）年で、それまでは個人事業として、主に魚の養殖用のブイや浮棧橋などの浮力体を製造していた。浮力体の原料は発泡スチロールであるが、耐久性が弱いためと出合った。CAD・CAMはコンピュータを使った設計・加工システムで、これを使えば複雑な形状でも、コンピュータのデータに従って発泡スチロールを削ることができる。しかも、それまでは採算面から金型による大量生産でなければ対応できなかったが、このソフトを使えば少量生産も可能となるし、大きさや向きを変えられることもできる。

中村社長はさつそくソフトを導入したが、それだけでは加工できない。製品の形状などを精密にデータ化する装置や、そのデータに対応して削る加工機械も必要だった。中村社長は、それぞれのスキャンリストと直接会い構想を説明していた。

「最初は皆さん、半信半疑でしたが、構想を説明すると、積極的に協力してくれました。この事業は、私自身が技術を持つていたり開発したのではなく、既存の技術をアセンブリーすることによって誕生したといえます」。製造体制は半年後には構築できた。

### ビルの壁面緑化にも応用

こうして開発した技術が注目されたのは、あるテーマパークでの昔の街並みの再現だった。それがきっかけとなり、マリノフROOTには建築用装飾や造形品の注文が寄せられるようになった。建築用装飾などに使われていたFRP（繊維強化プラ

に、数年で使えなくなるといった問題があった。そこで開発した技術が、ウレタン樹脂で発泡スチロールをコーティングして強度や耐久性を飛躍的に向上させることになった。

「この技術を使った製品はタムの流木止めやマリーナの浮棧橋などに使われるようになりましたが、浮力体以外に用途を広げ、付加価値を高められたいかと考えたのです」。こう語るのはマリノフROOTの中村俊社長（46歳）。それが新事業誕生のきっかけとなった。

### 既存技術のアセンブリーで 新製品を開発

用途拡大を模索していたとき、中村社長は、岡山市のナカシマロペラ株式会社が開発した三次元のCAD・CAMソフト

（ストック）素材に比べ、発泡スチロールは納期が短く、コストも安い。受注は右肩上がりに増えていった。しかし、それとともに同業者も、二次元加工ではあるが、建築用装飾に参入するようになり、価格競争が激しくなってきた。

そこで考えたのが、植物の容器に適している、断熱性が良いといった発泡スチロールの特性を生かして、壁面緑化に活用することだった。発泡スチロールで製作した大きな「プランター」で壁を覆い、そこに鉢植えの植物を並べよつというもので、これにより二酸化炭素の削減にも貢献できる。これは東京の最新ビルにも採用されており、テレビでも紹介された。

### 課題を解決して 社会に貢献する

「その次は、もう一度海に帰ろうと考えています。水産業を見回してみると、船舶の錆や、食品加工場の衛生を維持するための床のコーティングなど、数多くの課題があります。そうした課題を解決するために、新たにマリノフROOT工法を開発しました」と、中村社長。マリノフROOT工法は二十秒で硬化する樹脂を、100ポルト対応の塗布機で吹き付ける工法だ。これにより、食品加工場の床は休業することなくコーティングできる。

「みんなが困っていることを解決すれば、



荘厳な空間を演出する、はりなどの建築用装飾



環境保全にも貢献する壁面緑化



エントランスなど、結婚式場には多くの建築用装飾が施されている。

社会にも貢献できます。そのためには、現場に足を運び、付加価値を高める事業を考え続けることが必要だと思います」と、中村社長は言葉を結んだ。

海の浮力体からスタートした事業は、素材をコアとし、多様な技術をコーディネートしながら、新しい事業を開拓し続けている。

# 宇部新都市「あすとぴあ」《山口県宇部市あすとぴあ》

県産業技術センターを中核とした学術・研究開発拠点



## 特徴

- 魅力ある産・学・住の複合拠点**  
 人材育成や研究開発用地の「テクノセンター」  
 商業施設用地の「タウンセンター」  
 集合・個別住宅用地の「中核ハビテーション」と多彩な分譲地
- 陸・海・空の交通網の重要結節点と近接**  
 宇部港（重要港湾）から10km 韓国・釜山へ定期航路が週1便  
 山口宇部空港から7km 空路で東京から90分  
 山陽自動車道宇部ICから4km 陸路で福岡から1時間40分、大阪から5時間50分  
 JR新山口駅から19km 山陽新幹線で福岡から35分、大阪から111分
- 豊富な優遇制度**  
 山口県企業立地促進補助金（限度額10億円）  
 山口県情報・通信産業等立地促進補助金  
 山口県産業団地取得補助金（30%～60%）  
 山口県中小企業制度融資



## お問い合わせ先

山口県商工労働部企業立地推進室 TEL(083)933-3145 メールアドレス：a169001@pref.yamaguchi.lg.jp

詳しくはホームページをご覧ください。 URL <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/kigyo-r/index.htm>

## 夢 紡 人

ゆめつむぎびと

56

## 相互扶助の精神で

## 新たな社会のモデルづくりを目指す小田貢さん

お互いに連携しながら、「助け合い」社会の新たな仕組みをつくらせようと立ち上がった一人の医師は、さまざまなボランティアグループやNPOなどに声を掛けながら、助け合いのまちづくりを基本とする大きな福祉の輪、行政との協働の輪を構築しようとしている。



### profile

#### 小田 貢 おだ・みつぐ

1944年島根県安来市生まれ。大学を卒業後、米国の大学に留学。鳥取大学医学部附属病院助教授を経て、真誠会セントラルクリニック院長・理事長。社会福祉法人真誠会理事長なども務めている。

文・写真：中山昇治（鳥取市在住）

## 新たな社会のモデルづくり

「これからの社会は、行政に何でも頼ることはできません。その一方で、市民の力にも限界があります。だからこそ、両者の架け橋となる、リーダーシップをもったサポート役が必要となるのです」

意気に感じ、一人の医師が立ち上がった。相互扶助の精神で、少子高齢化によって起るさまざまな問題に真つ向から対処するため、助け合いのまちづくりを基本とする「新たな社会のモデルづくり」の仕組みを打ち立てよう、と。

鳥取県米子市で、クリニック院長を務めながら社会福祉法人を運営している小田貢さん（63歳）である。そのために設立したのがNPO法人「がいなネット」で、小田さんは理事長を務めている。

物腰はやわらかいが、論鋒は鋭い。地域医療福祉で積み上げてきた知恵、人脈のすべてを注ぐ。

鳥根県安来市に生まれ、鳥取大学医学部を卒業して医師となった小田さんは、鳥取市立病院内科、鳥取大学医学部付属病院助教授を経て、一九八八（昭和六十二年）に「医療福祉のまち・米子ホスピタウ」を設立する。

## 善意の手を結ぼう

応接間に飾られた満開の桜の生花の傍

従来、生活の場での援助は自治会などが役割を果たしてきた。しかし、目立たないが地道に活動している団体や個人もたくさんいた。そこで、そうした団体や個人を再発掘してネットワークに加入してもらおう。「ネットワークの総合商社、協同組合」を狙い、ボランティア、NPO法人を「コーディネート」することが大きな役割である。

では、どのようなボランティアが必要なのか？

「在宅介護が増えて、独り暮らしの老人も多くなり、高齢者の在宅支援がより一層大切になってくるでしょう。そうした時お年寄りに新聞を読んであげたり、厳冬期にストーブに灯油を入れたり、病院に案内する、安否を確認するなどの助けをする人が求められます。これからは、確実に一人では生きてはいけません。他人の世話にならないと、生きてはいけないのです。でも、地域全体で助け合っていくようなボランティアや仕組みは、今は残念ながらないのが実情です」

## ケーブルテレビを活用した広報

NPOは、とかく自分たちの活動だけに熱中しがちで、その活動を社会にアピールすることが少ない。それに風穴を開けたのが、ケーブルテレビを活用しての広報活動である。

らには、大型のテレビと三台のパソコンが並んでいる。

「紙だけに頼る時代は終わりましたね。これからはインターネット中心のITをいかに駆使するかにかかっているでしょう」テレビをつける。「がいなネット」の活動のあらましが映し出される。用意周到である。

自らも「コンピュータを使い始めると夢中になってしまふ。ホームページでのリアルタイムの発信、メールマガジンの発信で仲間内での情報交換を絶えまなく行う。地元のケーブルテレビ「中海テレビ」のパブリック・アクセス番組で、市民にがいなネットの活動を紹介している。そのイントロ部分では、寄せては返す波をバックに、小田さんが作詞した「善意の手を結ぼう」が流れる。

「羽二羽の小さな鳥が群れをなし  
まるで大きな鳥のように空を舞つ  
そよかぜにゆられてひろひろついでに  
小さな葉っぱも

遠くから見ていると  
大樹の一枚の葉っぱ  
小さなもじもじも  
沢山あつまれば  
灯台のような光をはなち  
船をみちびく  
二十世紀は

五月に二回、自主制作で番組をつくる。台本づくりから編集までNPOの会員がこなす。二十分の番組を制作するのに二週間是要する。

内容は、がいなネット自身のPRよりは将来の健康長寿に向けてのアンチエイジングをテーマにした歯科的観点からの教育番組、認知症予防策など、健康管理から男女共同参画のあり方について米子市の担当者へのインタビューまで、社会性に富んだものがほどんどである。

こつ紹介すると、テレビ番組だけがクローズアップされがちな活動だが、防犯パトロールや他の団体との連携、支援も月に一回こなしている。

特に、男女共同参画、市民参画に関しては、行政とも歩調を合わせながら「しなやかな関係づくり」を進め、行政との協働活動のリーダーシップを取っている。

他団体との連携でもビールを飲みながら、米子を精神的に豊かな街にすることを語り合つ一方、中海再生を願うグループボランティアと協働したり、助け合いの社会を具現化するネットワークづくりのシンポジウムを定期的に開くなど幅広い。

## 他人の喜びを

## 自分の喜びとする

発足して二年にも満たないが、市民からの手応えはある。嚆矢としての役割は浸

私たちが善意の心の手をむすぶ助け合ひで生きる時代なのです

## 団体や個人を包括するネットワーク

エンディングだけで、活動の真骨頂を言いついては、しなやかなアイデアだ。

社会も家庭も変革期の真つ只中であるが、先は読めない今日、少子高齢化問題が社会問題となるべくは二十年先だろうと指摘されている。それを解く糸口は、子どもからの情操教育、社会活動、ボランティア精神を幅広く教育にあることは確かである。

がいなネットは、そうした新たな問題に対処するために、二〇〇六（平成十八）年五月、異なつた分野で活動しているボランティア団体や個人、NPOを包括するネットワークとして設立された。現在は個人会員九十人で、十五団体を擁する。

## ネットワークの総合商社

互いに連携し合ひながら、「助け合い」社会の新たな仕組みをつくりだす壮大な計画である。使命感がないと務まらない。「ボランティア」といつく、犠牲的精神が求められる、なかなか敷居が高いように受け取られがちです。そうではなく、仕事、趣味で培ったスキルを地域のために役立ててもらおうと「いなネット」は、

透しつあるようだ。

「子どもの健全育成を願う親の会、高齢者の介護支援やまちづくりボランティア、善意の団体、また新たに助け合いの輪に入りたいという個人など、多くの市民が呼びかけに応じて来ています。他人の喜びを自分の喜びとする人は広がっていると体感しています。落胆していても、光は見えてきませんか」

市民、行政、メディアをも巻き込み、まだ経験したこともない少子高齢化社会へのモデル社会づくりの「灯台役」を担う。

## 次世代のモデル地域社会を目指す

手弁当で見返りはない。温もりが伝わる人柄、問題を解きほぐしていくまなざしの深さ。

だから、打ち寄せる波のように、多くの人々が引きつけられるのだらう。

「ゆくゆくは、市民一人ひとり誰もがボランティアという意識が芽生えて、助け合ひて安心、安全な町、何がなくても心が優しく豊かな街ができれば、次世代のモデル地域社会として全国に誇れるものになる」

きこばりと言ひ切る。

時代を先取りする小田さんの、「がいな（大きな）夢」は、緒に就いたばかりである。



定期的に開催している会合にはいつも笑顔が絶えない。写真提供：がいなネット

## 中山昇治 なかやま・しやうじ

1950年鳥取市生まれ。編集者。大学を卒業後、新聞記者を経て帰郷。現在は、新聞社のフリーペーパーや町史などを編集している。



やわらかい言葉で助け合いの必要性を語る小田さん。左はテレビ番組づくりが評価されて受賞した企画賞の橋。



## CREATOR 中国地域の創造者たち 4

映画監督 錦織良成 にしこり・よしなり

(1962年島根県出雲市(旧平田市)生まれ)



しまね映画塾で「指導」する錦織さん(写真提供:しまね映画塾)

いのかといつてですか」

そんな錦織の心を揺さぶったのは、生まれ故郷である島根の風景や人々の生き方であった。何も無いと思いついて島根を振り返ったとき、そこは映画の素材の宝庫だったのだ。こつこつと誕生した映画『白い船』は島根だけでなく、東京や大阪などの大都市でも観客を魅了した。

錦織は四年前から、島根県で「しまね映画塾」に取り組んでいる。これは、映画づくりのノウハウを教えるのではなく、経験のない人が映画を撮るステージを提供するものだ。その塾で「指導」しながら、錦織はクリエーターといながら常識に縛られている自分に幾度も気付かされた。ふるさとで「教え」ながら、実は自分自身が教わっていたのだ。そう気付いたとき、映画の素材としてだけでなく、表現者としての「姿勢」の面でも、島根は学ぶべきことが豊かであることに驚かされたといふ。

錦織にとって映画の原点は心を動かすこと。それを追い求めながら、錦織はこれからもフィルムを回し続ける。



写真:前田カツヒコ

高校時代、錦織は演劇に熱中し、全国大会に出場したこともあった。そんな錦織が映画の世界に入るきっかけとなったのはテレビだった。演劇を学ぶ先輩からの誘いでテレビのスタッフを務めたとき、同じスタッフだった映画人との交流から、少しずつ映画の魅力を意識するようになった。スタッフ一人ひとりが自分たちの作品として映画を語る姿に強い共鳴を感じたのだ。錦織は、そんなスタッフのアドバイスを受けて、脚本を書き、映画会社に持ち込んだ。それが第一作となる『BUGS』だった。この作品は東京国際ファンタスティック映画祭で話題となり、錦織は映画監督としての道を歩み始めた。それ以来、錦織は五作品を発表しているが、一貫しているのは自分で企画し、脚本を書き、脚本をもとに出演者たちと交渉し、メガホンをとるといった「正攻法の映画づくり」である。

「それは、現在では珍しい手法かもしれないが、私は堅持し続けたいと思っています。今の映画に求められているのは、何のために映画を撮るのか、何を表現した

佳味彩々

5

# 音戸ちりめん

おんど

《広島県呉市》

その昔、平清盛が西の海に沈む夕日を金の扇で呼び戻し、一日で切り開いたと伝えられる「音戸の瀬戸」。その音戸の味覚として知られているのが、地元で生産される「音戸ちりめん」だ。

音戸ちりめんは、近海で水揚げされた片口鱚の稚魚をすばやく塩ゆでし、天日や乾燥機などでよく乾燥させたものである。よく乾燥しているため日持ちが良く、しかも変色しにくいために、土産品としても重宝されている。

瀬戸内海で捕れるちりめんは、荒波にもまれないため身が柔らかい。そのため、海水が身にしみこみやすく、だしがよく出るのが大きな特徴だ。

ちりめん漁は、二艘の船で網を手繰り寄せ、ワイヤーで引きながらちりめんを捕る。捕れたちりめんは加工場の四

角い平らな容器に並べられ、容器とゆで釜に入れられる。ゆで上がったちりめんはしっかりと乾燥させて、商品になしていく。音戸ちりめんが捕れる時期は六月の初旬から七月の終わりまで。ちょうど梅雨や気温が高くなる季節であるため、品質管理には特に気を使っている。

音戸ちりめんのもつひとつの特徴は、現代人に不足がちなカルシウムが豊富であること。そのため、健康に気を遣う人にも人気の商品となっている。

炊きたてのご飯の上に、音戸ちりめんをひとつまみ。磯の香りとともに口に入れると、しゃきとしたちりめんは噛めば噛むほど味が出て、うまみが口いっぱいに広がってくる。

しっかりと歯ごたえの音戸ちりめんは、食べ応えのある海の逸品だ。



## 深田氏庭園

《鳥取県米子市》



山陰最古の風光明媚な庭園



正面から見た三尊石

山陰地方に現存する最も古い庭園のひとつで、「元弘の変」（三三三年）で隠岐へ配流される後醍醐天皇が立ち寄りたといわれも、個人の庭でありながら、鎌倉時代から保存されているというのは驚異的なことである。

深田家は、近江佐々木源三秀義七代の孫佐々木兵衛信輝に始まる。信輝が伯耆国浜中の里に来て深田を開墾し、この地の豪氏となって「深田」を姓としたといふ。

作庭は鎌倉時代の末期、二代満信の代（二八七～三〇〇）である。書院造りに池泉鑑賞の様式を取り入れた池泉鑑賞蓬菜式で、池中に亀島と鶴島を配し、築山には三尊石を建てて枯澗を表現している。百三十五坪という小庭園だが、非常にまとまりがよい。

この庭園の最大の特徴は、亀島と鶴島にある。亀島は、凝灰岩を用いて作られた亀頭石が直立的で力強く、亀甲石や手脚石も完全な形で残っている。対する鶴島も同じく凝灰岩が用いられている。鶴島の首部分の動的で写実的なこと、また、雛をその下に抱いているかのような羽石に優美な趣きがある。

鎌倉時代に造られた庭園のうち、鶴島両島の原型をとどめている庭園は、この庭園と京都西芳寺（苔寺）の二つだけといわれており、歴史的価値も高い。三尊石も含めて使われている石材は近くの大山系の凝灰岩と考えられている。

平成十二（二〇〇〇）年には国指定保護文化財として名勝に指定された。

私邸の庭園であり、見学は予約制。お茶とお菓子をいただきながら、庭園の案内を受けることができる。



池の中に配された亀島（左）と鶴島（右）



写真：迫文雄

## 工芸の旅 5

# つわの和紙人形

《島根県津和野町》

津和野周辺に自生する楮こうぞや三椏みつせだなどを原料にした石州和紙は素朴な肌色が特徴である。その和紙を使ったつわの和紙人形は、和紙づくりで培われた伝統の技と現代感覚をミックスさせたものである。その表情は多くの人たちから愛され、お土産品や記念品として喜ばれている。



「碧い風」VOL.60 2007年7月1日発行

発行人・ももた百田耕三 編集人・城市 創  
企画・発行・中国電力株式会社 エネルギア総合研究所  
〒739-0046 東広島市鏡山3-9-1 ☎082(420)0700  
[ホームページアドレス] <http://www.energia.co.jp/eneso/tech/index.html>

編集・制作・有限会社城市創事務所  
〒102-0073 千代田区九段北1-8-2 九段第二勸業ビル ☎03(3234)4656

ISSN 0918-9335

禁・無断転載